

てんやわんやの座談会

「質問をつづけます。まことに失礼ない分ではありませんが、皆様方御上人は大伽藍にすまわれてわれわれ民衆とはあまりにも、かけはなれておると思うのであります。ところが、皆様方が邪教だときめつける日蓮法師はどうでありましょうか、毎日のように大町小町の辻にたつて、説教をしております。民衆の不平を直接にきいてくれております。その説くところは、皆様方からいわせれば、邪教だ、邪宗だといわれますが、その態度は、一概に非難されるべきものではないと思うのでありますが、この点をお答え下さい」

これは、講師にとつては一寸、痛い質問であつたが、さすがは多宝寺の住職である。すこしもそのことは顔色にもみせなかつた。

「感謝いたします。只今のご質問は、まことに結構なご質問でした。只今のは、われわれに対するご注意として、充分に拝聴いたします。仏教には獅子身中の虫という言葉が、仁王経や蓮華面経等にみえております。それは、獅子が死んだ時には、さすがに百獣の王といわれる獅子であり

ますから、他の動物はこれをおそれまして、獅子を食うことをいたしません。ただし獅子の身中から虫を生じまして、このわが身の中にうまれた虫が、その獅子をたべるといのであります。仏の正法も、これを他からこわすことは出来ないものでありますが、法中の悪比丘がこれを破壊するということにたとえられておるのであります、まことに遺憾の極みであります。われわれは、この反省から出発して、その後には日蓮法師と対決すべきだと思えます」

満堂を圧するような拍手が急に生じて、多宝寺の住職を驚かせた。多宝寺の住職は、自分の解答に気をよくして、

「まだご質問がありますか」
とうながしたのである。

「はいご質問をいたしません」
と調子にのつて、自分の方に御をつけていい出した奴がいたので、おもわず、書院内がわあっと笑いにゆれた。

「なんですか」

「日蓮法師がこの間、小町の辻でいったことを、私は直接きいたのですが、あの法師は、安心立国論とかいう」

「それは、立正安国論でしょう」

と、多宝寺の住職に注意され牡が、この質問者は、どうでもよいことだと、その注意は一向にとりあわず、質問をつづけた。

「その安心立国論で、法師は、本年の正月に大蒙古国の国書がきたことも、九か年も前に予言したというのでありますが、これは本当のことでしょうか。もし本当なら、生き仏だと私も思いますが、もし、嘘だったら、これこそ大嘘つきの悪坊主だと思うのです。この点はいかがでしょうか。それからもう一つ、本当に蒙古というような国があるのでしょうか。その国から、この国を攻めてくるというようなことがあるのでしょうか。ぜひ、ごゆつくりと、わかりやすく教えてください。ただきたいと思うのであります」

多宝寺の住職は、につこり笑いながら、質問に答えた。

「只今のお方は、安心立国論と申されましたが、これは立正安国論が本当であります。そんなことをいつていたんでは、あの宗旨の方から笑われますから、ぜひともおぼえておいて下さい。さて、立正安国論は、私もざあつと眼を通しましたが、その論文中には、蒙古が攻めてくるとはつきり書いてあるところは一か所もないのでありますから、その点はお安心下さい。したがって、九か年も前に、蒙古襲来を予言したなど、いうことは、絶対にありません。このことだけでもいいか、日蓮法師が、気狂い坊主であるかがわかるではありませんか。蒙古という国があるのかという質問ですが、あればこそ、本年の正月一日に、太宰府に国書をもってきたのであります。

この質問のお答えはこれでよいでありましょう。さて、その蒙古の国が、わが神国日本を攻めてくるかということですが、わが国の国体を少し研究しますれば、すぐわかることでありまして、これも問題にならないと思うのであります。この辺で、あなたのご質問のお答えは終了です」

「そんな、でたらめなことをいう坊主を、何故みなさんは、ほうっておくのですか、やつつけちやったらいいではないですか」

と、怒って立ちあがった者が二、三人、座の中にとびだしたのである。ようやく、座談会の空気は、司会者の思うように動いてきたらしい。

「そうです。そのために、本日、この会議を開いたのであります」

多宝寺の住職は、すかさず、その場の空気をあおるのであった。

「そうだ、そうだ、やつつけろ、などと、騒ぐものがいたが、雷のような声がして

「日蓮の、それでは、どこをやつつけたらいいというんだ。わからないではないか」

急に、大入道のような坊主が、座の真中に立ちあかつて。四辺を睨みつけた。あまり威勢がよいのと、昂奮して、頭から煙のような湯気が出ておるので、おかしいやらおつかないやらで、座中は妙なふんいきになった。

「日蓮法師の流れをくむものが現世利益を説きすぎると、非難してみたところで、各宗とも現世利益は私の方が一手専売ですと、暮だ正月だと、その時期時期にでっかく騒ぎたてたり、とげぬ

き地藏だ、仙気のなんだのと、あげたててみりや、日蓮より、こっちの方が多くくらいではないか。だから、愚僧がここで、はっきりいっておくよ。日蓮の教義を悪いといって教義の批判ということになれば、天台は真言を批判しなければならず、真言宗が浄土宗を非難すれば、浄土宗も真言宗を非難するだろう、禅宗は、それこそ、天台真言浄土これらは、味噌も糞も一緒だというだろう。この座中でさえ、念仏禅真言の僧侶は、それは、表面は口を謹んでおとなしくしておるが、腹の中では、各宗が各宗の坊主をみることに、日蓮坊主を見るようなものだと思うんだ。なんで、立派な相談が出来上るものか。先程、誰だったか、えらいことをいやがった。鎌倉の五山の貫長さんは、大伽藍にすんでいて、民衆とは離れたところにいらいらしやる、日蓮法師は、小町の辻で、民衆の悩みをきいてくれてるといったつけ。そうしたら、その解答がなんだつけ、只今のご質問は結構でした。感謝します。感謝しますだよ。きいたかい、なんて胸糞の悪い、偽善者の答弁だ。ききたくもない、獅子身中の虫の説明をして、そっちは、腹の虫がそれでおさまったかは知らないが、こっちは、獅子身中の虫あつかいで、大層ありがたいことだったよ。その反省から、出発して、日蓮法師と対決しますといって、一座のご喝采は拍したが、一体、どういう対決をするというのか、それを聞かせてもらいたい。向うは、それこそ、叡山に十年、伊豆の伊東には三か年という、文字通りの海千山千の大坊主だ。失礼だが、この調子で座談会をやっていたら、一か年かかったって終るもんじゃない。日蓮のいうことが本当なら、家古が攻めてくる

というのだ。蒙古が攻めてきたら、念仏も真言も浄土も宗旨の区別なんか、あるものか、みんな一緒になって国を護らねばなるまい。それなのに、私は大日様の方に行きますから、私は阿弥陀さまのところをまいりますから、いや、私は薬師さまのところに行きますから、お国の方は、後の方々に護っていただきます。なぞとのんきなことが、いつてられるものではないじゃないか。こうなれば、法論などは後まあした。各宗とも、この日本の国を、いかにして守るかということが、目下の急務ではないか。だが、もう少して、愚僧の話は終るからがまんしてきけ。いいか、ところがだよ、日蓮のいうところが偽だとしたら、どうなるか、蒙古など襲来してはこない。国難来は嘘だ。氣違いだ。氣違いでなければ、こんな重大なことを真面目な顔をして、往来で他人にしゃべれるものではない。さて。日蓮を氣違いだとすれば、その氣違いのいうことを真に受けて、この大仏殿にあつまつた奴等も、これまた、氣違いである。愚僧は氣違いの中に入れて、今まで、がまんしてそのお説を拝聴していたが、日蓮を氣違いなりと断定したら、この大仏殿の書院にあつまつて、二刻あまりも、ご質問だ、ご解答だといっておつた、われわれが、氣違いだと氣がついたのである。こんな座には一刻もおろることができんから、只今、失礼する、御免！」

湯気をたてた大入道が、発狂したのではないかと思う程、どなりたてたので、一座はしんとしずまったが、話が終ると猛虎のような勢いで場外にとび出していったので、事なきはえたが、それから、この大仏殿の座談会の氣勢はあがらず、結局、大仏殿会議は、なにがなんだか分らずじ

まいで、決定することもなく、終わったのであった。

